

平成23年度 果樹情報 第7号

(平成23年7月5日)

福島県農林水産部農業振興課

1 気象概況 (6月4～6半旬：果樹研究所)
 平均気温は、4半旬が20.2 で平年より0.3 低く、5半旬が23.3 で平年より3.0 高く、6半旬が22.6 で平年より1.7 高く経過しました。この期間の降水量は92.5mmで平年の113%でした。

2 土壌の乾燥状態 (果樹研究所)
 6月30日現在の土壌水分 (草生栽培リンゴほ場：無かん水) は、深さ20cmがpF1.9、深さ40cmがpF1.6、深さ60cmがpF1.6であり、深さ40cm以下では過湿状態となっています。梅雨期は降水量が多く、湿害の危険性が高まるので、排水対策を徹底しましょう。

3 生育概況 (7月1日現在：果樹研究所)

表 主要品種の果実肥大 (暦日比較 果樹研究所7月1日調査)

果実肥大	モモ				ナシ				リンゴ			
	あかつき		ゆうぞら		幸水		豊水		つがる		ふじ	
	縦径	側径	縦径	側径	縦径	横径	縦径	横径	縦径	横径	縦径	横径
実測値(mm)	47.3	44.4	43.9	37.5	32.3	39.3	34.8	37.9	51.2	56.0	44.8	48.3
平年比 (%)	101	99	95	92	103	106	105	108	105	103	102	104

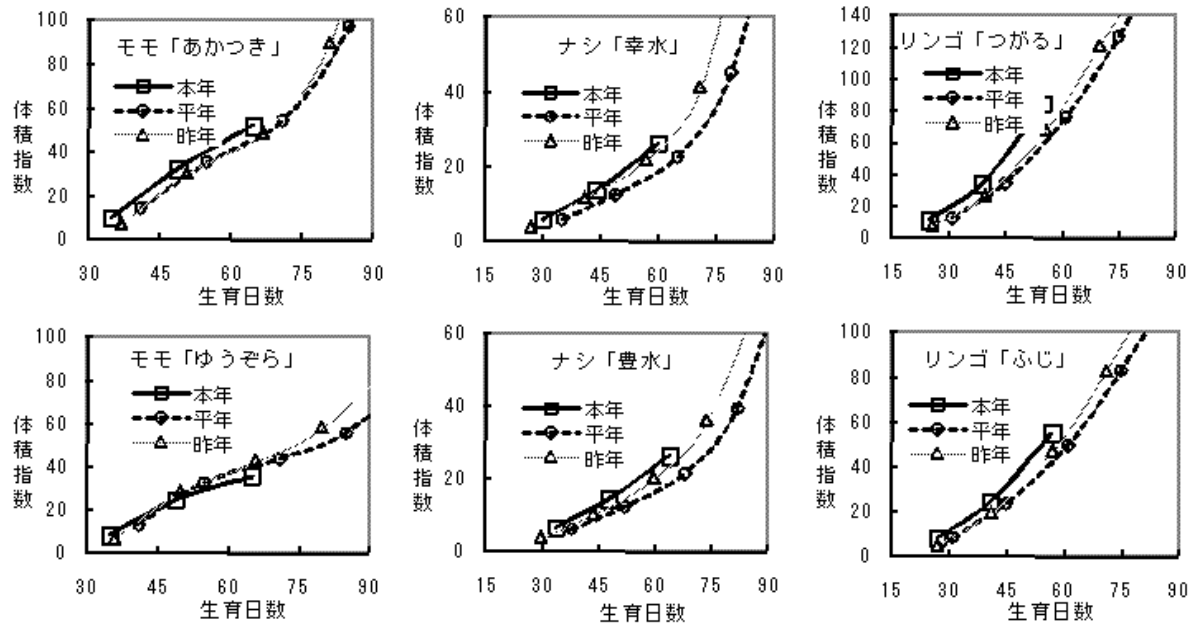


図 主要品種の果実肥大 (果実の生育日数比較 果樹研究所7月1日調査)

(1) モモ

果実肥大を暦日で比較すると、「あかつき」は縦径が47.3mmで平年比101%、側径が44.4mmで平年比99%と平年並み、「ゆうぞら」は縦径が43.9mmで平年比95%、側径が37.5mmで平年比92%と平年より小さい状況です。果実の生育日数による比較でも、「あかつき」は平年並み、「ゆうぞら」は平年より小さい状況となっています。

「あかつき」の新梢生長 (満開後62日) は、長さが平年比63%と短く、新梢停止は平年より早い状況となっています。

農業総合センター果樹研究所によると、「あかつき」の収穫開始は8月5日頃で平年より3日程度遅く、収穫盛りは8月8日頃で2日程度遅いと予測されています。

(2) ナシ

果実肥大を暦日で比較すると、「幸水」は縦径が32.3mmで平年比103%、横径が39.3mmで平年比106%、「豊水」は縦径が34.8mmで平年比105%、横径が37.9mmで平年比108%と両品種ともに平年より大きい状況です。果実の生育日数による比較でも、両品種ともに平年より大きい状況です。

「幸水」の新梢生長（予備枝：満開後60日）は、長さが平年比124%と長く、葉数は平年比119%と多い状況です。

農業総合センター果樹研究所によると、「幸水」の収穫盛りは9月5日頃で平年より3日程度遅いと予測されています。また、「幸水」の裂果初発日は7月17日（満開後76日）頃と予測されています。

(3) リンゴ

果実肥大を暦日で比較すると、「つがる」は縦径が51.2mmで平年比105%、横径が56.0mmで平年比103%と平年より大きく、「ふじ」は縦径が44.8mmで平年比102%、横径が48.3mmで平年比104%と平年よりやや大きい状況です。果実の生育日数による比較では、両品種ともに平年より大きい状況です。

「ふじ」の新梢生長（満開後50日）は、長さが平年比83%と短く、新梢停止時期は平年並みの状況です。

(4) ブドウ

「巨峰」の新梢生育（有核栽培：発芽後70日）は、新梢長は平年比148%と長く、展葉数も平年比124%と多い状況です。

4 栽培管理上の留意点

(1) モモ

ア 早生品種の収穫

間もなく早生品種の収穫が始まります。収穫前の降雨が多い場合や、核障害により胚に障害を受けた果実が多い場合は、果肉の成熟が早まりやすく、軟化が早い傾向があるので、収穫が遅れないように注意しましょう。

イ 修正摘果

硬核期が終了し、果実に肥大差が見られるようになったらすみやかに修正摘果を実施します。核障害の発生が多い場合は、2～3回に分けて修正摘果を実施します。特に、果頂部が変形している果実や縫合線が深い果実、果面からヤニが噴出している果実、果皮の一部が変色している果実、極端に肥大の早い果実、果頂部の着色が早い果実などは、核や胚に障害があることが多いのでこれらの果実に注意して摘果を実施しましょう。

ウ 中生品種の収穫前管理

「あかつき」等の中生品種は今月下旬頃から着色期に入りますので、夏季せん定、支柱立てや枝吊り、反射シートの設置など収穫前の管理が遅れないよう計画的に実施しましょう。

(2) ナシ

ア 新梢管理

「幸水」の新梢誘引は、満開後65～75日頃（新梢停止期の約10日前）が適期です。腋花芽着生を促すため、新梢誘引を徹底しましょう。また、新梢誘引は腋花芽着生向上の他、樹体の受光条件向上、薬剤散布の効率化、翌春における長果枝棚付け作業の効率化などの効果も期待できるので「幸水」以外の品種でも積極的に実施しましょう。

イ 着果管理

仕上げ摘果が終了していない園では、速やかに実施しましょう。単位面積あたりの着果量を確認しながら、着果過多にならないよう摘果作業を進めましょう。なお、裂果が観察される時期の摘果は、他の果実の裂果発生を助長する恐れがあるので控えましょう。

(3) リンゴ

ア 着果管理

仕上げ摘果の遅れは花芽分化率の低下につながるため、7月上旬（満開60日後）まで仕上げ摘果を終了させましょう。仕上げ摘果終了後は、随時修正摘果を実施し、小玉果や変形果、病害虫の被害果、傷果、サビ果等を摘除します。

イ 枝吊り・支柱立て

果実肥大にともない枝が下垂してくるので、樹冠内部の日当たり改善と枝折れ防止のため、支柱立てや枝吊りを実施しましょう。

(4) ブドウ

ア 着房管理

着房過多は、糖度上昇の遅れ、赤熟れ果の発生を招く要因となるため、着房数の見直しを行い、ベレーゾン（水回り）期までに適正着房量に調整しましょう。最終着房数の目安は「巨峰」では3.3m² 当たり9～10房、「高尾」では10～11房とし、樹勢や今後の天候の推移をみながら適宜調整します。

イ 摘粒

摘粒作業では「巨峰」は30～35粒/房、「高尾」は40～50粒/房残します。時期が遅れると、果粒同士が密着状態となり、ハサミが入りにくくなり、果皮を傷つけ裂果や病害発生の原因となるほか、作業性も落ちるので早めに摘粒作業を行いましょう。

ウ 袋かけ及びカサかけ

摘粒が終わり次第、速やかに袋かけを行いましょう。袋かけは7月上旬までを目標としますが、遅れた場合にはベレーゾン期以降の7月下旬以降に行います。袋内温度の急激な上昇は日焼け果発生の原因となるため、日中の気温が30℃以上になるような時期の袋かけは避けましょう。また、袋かけと同時にカサかけを行うと日焼け防止に有効です。

5 病害虫防除上の留意点

(1) 病害

ア リンゴ輪紋病、褐斑病、斑点落葉病

輪紋病は果実、枝梢部ともに感受性が高い時期となります。また、降雨日が多くなると褐斑病、斑点落葉病の発生にも注意が必要ですので、散布時期を逃さないよう防除を行いましょう。

イ モモせん孔細菌病

被害葉、被害果実は二次感染源となるため、見つけしだい摘除して適正に処分するとともに、防除を徹底しましょう。

ウ モモ灰星病・ホモブシス腐敗病

早生種では灰星病、中～晩生種では灰星病とホモブシス腐敗病の重要防除期となるため、散布間隔に注意して防除を徹底しましょう。

エ ナシ黒星病・輪紋病

梅雨期は黒星病、輪紋病の重点防除期にあたるため、散布間隔に注意して防除を徹底しましょう。また、黒星病の罹病部位は見つけしだい取り除き、適正に処分しましょう。

(2) 虫害

ア ナシヒメシンクイ

第2世代の防除適期は7月1半旬頃と考えられました。本種はモモ等の核果類の新梢伸長が停止するとナシの果実への寄生が増加するため、注意が必要です。発生状況に注意して防除を実施しましょう。また、高温年は交信かく乱剤のフェロモン成分が揮発しやすく、7月下旬頃から効果が低下することがあるので、例年、ナシの果実被害が多い地域では、防除を徹底しましょう。

イ モモノゴマダラノメイガ

被害が認められる園では、7月2半旬頃まで防除を徹底しましょう。なお、被害果実は見つけしだい摘除し、適正に処分しましょう。

ウ モモハモグリガ

第3世代の防除適期は7月1半旬頃と考えられました。近隣に放任園などがある場合は、特に注意しましょう。

エ ハダニ類

高温が続く場合はハダニ類の急増に注意し、要防除水準（1葉当り雌成虫1頭以上）の密度になったら速やかに防除を行いましょう。

病害虫の発生予察情報・防除情報

病害虫防除所のホームページに掲載していますので、活用してください。

<http://www.pref.fukushima.jp/fappi/>

農薬散布は、農薬の使用基準を遵守し、散布時の飛散防止に細心の注意を払いましょう。